

新卒社会人の職場適応と大学在学中の学業領域固有の知覚された無気力の関連

住岡恭子 (広島文教大学)

キーワード：学業領域固有の知覚された無気力，職場適応，新卒社会人

問題と目的

知覚された無気力 perceived apathy とは、長内 (2009) によれば、個人が自己の意欲や精神的なエネルギーの低下を主観的に認識している状態である。これは従来の無気力やスチューデント・アパシー研究とは異なり、個人の認知的側面に焦点を当てたものである。大西 (2016) は、「労力回避」「葛藤」「達成非重視」の 3 因子からなる学業領域固有の無気力状態測定尺度 (PASS-A) を作成し、学業に積極的な「積極群」、非積極的な「非積極群」、労力を回避したいがために無気力行動をとるけれども、それに葛藤する「回避-葛藤群」、学業上の課題の達成自体を重視していない「達成非重視群」という 4 群を見いだした。

本研究の目的は大学在学中の学業領域固有の知覚された無気力と、卒業後の職場適応の関連を検討することである。学業も仕事も、やらなければならないタスクであるという点で共通しており、就職後の仕事というタスクに向かい合った際の心理状態に、大学在学時の学業というタスクに取りくむ姿勢が関連している可能性は高い。

方 法

4 年制大学卒業後 3 年以内の新卒社会人 300 名 (男性 138 名、女性 161 名、その他 1 名、平均年齢 24.5 歳、SD=1.19) を対象に、個別記入式の質問紙調査を行った。調査の実施は株式会社クロス・マーケティングに委託した。調査時期は 2019 年 2 月であった。調査の開始画面に研究の主旨と、調査への協力が強制でないこと、プライバシーが保護されることを記した説明文を表示し、チェック欄を用いて同意を得た。

調査項目は a) 学業領域固有の無気力状態測定尺度 (PASS-A) (大西, 2016) 77 項目 5 件法、b) エトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度日本語版 (UWES-J) (Shimazu, 2008) 17 項目 6 件法、c) 職場適応感尺度 (野田・奇, 2016) 30 項目 5 件法、d) 自己評価抑うつ尺度 (SDS) (福田・小林, 1983) 20 項目 4 件法であった。

結果と考察

PASS-A について最尤法・Promax 回転による確認的因子分析を行った結果、大西 (2016) と同様の 3 因子構造が得られた。信頼性係数は労力回避が $\alpha = .87$ 、葛藤が $\alpha = .89$ 、達成非重視が $\alpha = .83$ だった。PASS-A と UWES-J、職場適応感尺度、SDS の相関分析の結果を Table 1 に示す。ワーク・エンゲイジメントにお

いては労力回避と没頭、葛藤と活力の間にそれぞれ負の関連が示された。職場適応感においては、葛藤と劣等感、達成非重視と劣等感、SDS の間にそれぞれ関連性が示された。

Table 1 PASS-A と各尺度の相関

	労力回避	葛藤	達成非重視
活力	-.070	-.118 *	.001
熱意	-.091	-.073	.020
没頭	-.099 +	-.076	.017
良好な人間関係	.093	-.070	.050
課題・目的的存在	.039	.014	.070
被信頼・受容感	-.009	-.081	.065
劣等感のなさ	.067	.316 **	.182 **
職場安心感	.071	-.105 +	.075
SDS	.055	.081	.114 *

k-means 法による分割的クラスタ分析の結果、大西 (2016) と同様の 4 群が得られた。クラスタを独立変数、UWES-J、職場適応感尺度、SDS を従属変数とした分散分析の結果、職場適応感の「劣等感のなさ」($F(3, 296) = 3.87, p < .05, \eta^2 = .04$) と SDS ($F(3, 296) = 3.60, p < .05, \eta^2 = .04$) に有意な差が得られた。*Bonferroni* 法による多重比較の結果、「劣等感」は非積極群が積極群よりも高く、SDS は非積極群が他の 3 群よりも高かった。各変数のクラスタ毎の平均値と標準偏差を Table 2 に示す。

Table 2 各変数の平均値と SD

	積極群		非積極群		回避-葛藤群		達成非重視群	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
活力	2.39	0.16	2.13	0.15	1.89	0.17	2.27	0.13
熱意	2.54	0.18	2.29	0.16	2.05	0.18	2.49	0.14
没頭	2.51	0.16	2.28	0.15	2.02	0.16	2.53	0.13
良好な人間関係	3.31	0.11	3.36	0.10	3.15	0.11	3.19	0.09
課題・目的的存在	3.07	0.11	3.18	0.10	3.08	0.11	3.14	0.09
被信頼・受容感	3.10	0.10	3.16	0.09	2.91	0.11	3.02	0.08
劣等感	2.56	0.10	3.01	0.09	2.84	0.10	2.84	0.08
職場安心感	2.72	0.12	2.79	0.11	2.52	0.13	2.76	0.10
SDS	39.15	0.89	42.21	0.82	38.92	0.82	39.16	0.72

分散分析では有意な差がなかった変数も、クラスタ毎の平均値には若干の差異が見られた。大学在学中の学業領域固有の知覚された無気力と、卒業後の職場適応が関連する可能性が示された。

引用文献

大西恭子 (2016). 学業領域固有の知覚された無気力の探索的研究 教育心理学研究 64 (3), 340-351.

付 記

2018 年度京都文教大学ともいき研究推進助成により本研究を実施した。